

◆ 公共空間  
「公共空間」について少しお話しておきます。  
「Public Space is the City.」というのは、80 年代のバルセロナの都市計画をリードしたオリオル・ボイガスの言葉です。「公共空間にその都市が集約されている」ということです。  
また、近代都市計画を批判したアメリカのジャーナリストのジェイン・ジェイコブスの言葉に「ある都市を思い浮かべたとき最初に思い浮かぶのは街路だ。街路が面白ければ“都市”が面白い。面白くなければ都市が面白くない。」というのがあります。

公共空間と言ったり街路と言ったりしていますが、それらが都市を形成しているということです。  
公共空地、すなわち人が入っていける場所にどんな魅力があるかが、その街の魅力と関係があると言えます。その空地を公共が持つていようが民間が持つていようが関係ありません。

それらがどのように使われているかが大切で、今色々な取り組みがされています。そしてそこがどんな場所になって欲しいかイメージを持つことが重要です。空間としてのメッセージを出していくのが大切なのではないかと思います。

例：街中がせせらぎ事業（三島市）  
パークレット  
セッパックして公開空地をつくる  
ブライアントパーク（ニューヨーク市）  
「まちのことを行政に任せっきりでなく、自分もまちをつくっている一員なのだ。」と想像してみましょう。  
地域の課題を指摘して解決を望む声を上げることは勿論大事なことです。しかし行政に一方的に苦情を言うばかりでは、行政は委縮してしまい創造性が失われていきます。

課題を前にして自分なら何ができるか、解決するためには何が必要かを考える想像力を市民の一人ひとりが持つことが、まちを動かす力になっていくのだらうと思っています。



4

う方法を様々な事例をあげながら紹介していこうと思います。  
関係を築くと言いましても色々な関係があると思いますので、順を追ってお話したいと思います。

★ まちを知る  
「オープンハウスロンドン」 ロンドン市（イギリス）  
毎年 9 月の第 3 週の土・日の二日間、市内の 700 以上の建物が無料で一般公開されるというものです。建築というのはまちの文化であり、アイデンティティーであり、パーソナリティであるので、豊かな建築資源をもっと知るべきだという考えのもと行われています。この催しは、自分たちの環境を知る機会であり、市民に向けての建築教育の機会になっています。年を追うごとに市民だけではなく世界中から多くの人が訪れています。

また、オープンシティという NPO ができていて、1 年を通して一般市民に対して建築の教育をしています。特に子どもたちに対してはワークショップが盛んに行われています。

今ではオープンハウスワールドワイドが世界で広がっています。30 都市ぐらいでしょうか。日本のなかではまだこのネットワークに入っている都市はありませんが、やりたいと思っているところはありそうです。

そんな中で同じような取り組みをしているのに大阪があります。

「生きた建築ミュージアムフェスティバル 大阪」（イケフェス） 大阪市  
大阪には大正、昭和初期から高度経済成長期につくられた魅力的な建物がまだ多く残って使われています。古いものから新しいものまで 70 棟ほどを公開し、おとしは 1 万人、昨年は 3 万人（今年のデータはまだでていません）、どんどん増えています。

「蔵の日」 秋田県横手市  
重要伝統的建造物群保存地区の増田の町並みと普段公開していない建物を公開しています。

「青葉食堂」（アートイベント） 横浜市  
郊外の住宅地、自宅の門に葉っぱのかたちをした黒板をかけ、夕食のメニューを公開するものです。（池田光弘の作品）オープンハウスとまでは言いませんが、閉鎖的になりがちな郊外の住宅地を少しまちに開く効果があります。

講演のあと質疑がありましたので、その概要についてもお知らせします。

Q うまくいかなかった事例での失敗理由は？  
A 空間の繋がりが大切になると思うのですが、閉じた感じになるなど、それが良くなかった事例はあると思います。  
あと、キーパーソンがいることは大切です。理念を持って、面白がってやる人は必要だと思います。  
Q 成功と失敗など客観的に測る指標はありますか？  
A 今回は私がいいと思った事例を紹介しました。。  
効果測定について数値化することは難しくてなかなかできません。人口の増減や企業数など測れる部分はありますが、それ以外の要素もたくさんあります。  
大阪の「イケフェス」の場合は、直接的な経済的效果、メディアへの露出、社会的効果、人材育成の効果の 4 つを挙げて測っています。しかしこれですべてが測れるわけではありません。  
金山のことを良く知りませんので勉強しなとは言えませんが、名古屋の印象としては、「閉じている」感じがします。そこをチェックしてみるといいのではないのでしょうか。

Q 再開発の目的を決めるというのは難しいと思います  
が、再開発の出発点はどのように考えていけばいいですか。あと、文化的施設を軸とした開発の例を教えてください。  
A 先ずは「どういうまちであるべきか」を考えることが大切だと思います。  
文化施設を軸とした開発例としては、最近いくつか図書館を軸にしたものがあります。あまりにも有名な事例ではありますが、金沢の 21 世紀美術館というのがあります。美術館自体が開くように設計されています。

（その他、古沢公園用地に市民会館を建替えるということについて、地元の方々よりご質問をいただきましたが、この件については語る会で答えできる内容でない旨を事務局より説明させていただきました。）

<事務局 MEMO>  
「まち」を「知る」「言祝ぐ」「使う」「参加する」「関与する」「自己表現する」「妄想する」ことについて、多くの事例をご紹介いただきながら講演いただきました。  
確かに「まち」に関わることで、「まち」への愛着、誇りといったものが芽生え、育っていくような気がします。語る会でも、参加者の皆さんと一緒に積極的に「まち」に関わり、「シビックプライド」を高め、金山のまちをより楽しくしていけたらと思っています (^\_^)。

★ まちを言祝ぐ ～言葉でほめる～  
「札幌大通公園 100 歳記念バースデーパーティ」 札幌市  
まちのことを自分のことのようにお祝いしようというものです。

「扇や旅館の改修 餅まき」 新潟県村上市  
自分のことをまちにお祝いしてもらいます。

「The Grand Rapids LipDub」 グランドラピッツ（ミシガン州）  
グランドラピッツは、ニューズウィーク誌で「死に行く都市」として取り上げられました。これに発奮したまちの人たちが、「まちの素晴らしさを伝えるリップダブ（くちパク）でビデオを作ろう」とまち全体が一つになったプロジェクトを立ち上げ、完成したのがミュージックビデオ「The Grand Rapids LipDub」です。ワンカットの 8 分を超える大作で、ユーチューブで 1200 万回以上フォローされ話題になりました。今では住みたい都市になっています。

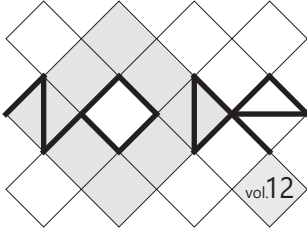
★ まちを使う  
「わいわいコンテナプロジェクト」 佐賀市  
空洞化する佐賀市の中心市街地で、自分たちで芝生の原っぱにウッドデッキのテラスをつくり、中古のコンテナを活用して空地リビングづくりをしました。中心は建築家の西村 浩さんです。中心市街地に子どもが集まっているのは珍しいことです。

最初は社会実験で行っていましたが、まちづくり会社を作って運営しています。この「わいわいコンテナ」ですが、あるエリアに密度を持たせて活性化しています。密度を持たせることによってその賑わいが周りに見えていきます。その結果、賑わいが周りに派生していっています。



★ まちに参加する  
「富山の LRT」 場所を表現する電車のビジュアルデザイン  
富山はコンパクトシティを目指していて、そのリーディングプロジェクトが LRT（次世代型路面電車）です。色が 7 色あって、色によって都市伝説のようなものが生まれ、思い入れが出てきました。電停のトータルデザイ

12/13 Tue.2016



kanayama  
machidukuri  
kawaraban

第 10 回の金山地区のまちづくりを語る会は、ゲストスピーカーに東京理科大学建築学科教授の伊藤香織氏を迎えて「シビックプライド」の話を伺いました。聞きなれない言葉ですが、より良い街を目指すこの語る会にとっては、とても重要な考え方、「気持ち」です。

伊藤氏は都市空間デザイン・都市分析がご専門で、都市の研究をされています。そして、1 年間に新たに 20 都市行くことを目指されており、13 年間で 260 ほどの都市に実際に行き、歩き、まちについて調べられたとのこと。

また、2002 年より「東京ビクニッククラブ」という活動をされているとのことですが、今回は、その話ではなく 2006 年から仲間と研究会を立ち上げられた「シビックプライド」の話をしていただきました。

『『まち』を自分のこととして シビックプライド』  
ゲストスピーカー：伊藤香織 氏

◆ シビックプライドとは …  
シビックプライドとは、都市に対する市民の想いのことです。日本語に「郷土愛」というのがありますが、少しニュアンスが違います。シビックプライドの場合は、「都市をより良い場所にするために自分自身が関わっていくある種の当事者意識に基づく自負心」を伴っています。

シビックプライドは、近代都市が勃興し急激な人口集中が進んだ 19 世紀イギリスにおいて、市民が都市の一員であると感じられるために、そして都市間競争の中で各都市が個性を誇るために重要視された概念です。多くの村々が近代都市へと変わっていくに伴い、都市の中心も王侯貴族から中産階級市民へと移っていきました。  
まちの拡大は他の地域からの人を呼び寄せ、地縁でない人間関係が構成されるようになっていきます。裕福な市民や社会改革者の登場で、市民のための施設が市民の働きかけや寄付で建造されるようになり、自分たちなりに誇りと力を持ってまちをつくり動かしているんだという自負が育っていきます。

時はイギリスの黄金期と言われるビクトリア朝です。経済の反映、文化の成熟を受けて、当時の建築物の装飾は見事です。たとえばマンチェスターやグラスゴーの市庁舎もありますが、リーズの市庁舎は今でもシビックプライドの象徴と言われています。

1

ンはスタイリッシュで統一感があります。広告はほんの小さく出ているのみです。「こんな小さな広告誰も出さないのでは」と言われていましたが、富山の企業はシビックプライドがあったのでしょう。ほんの小さな広告にもかかわらず多くの企業が出ています。

また、バレンタインのラッピングでは、全体のデザインはデザイナーがしますが、1 つ 1 つのハートに個人のメッセージを入れるという試みもされました。

「グランドプラザ」 富山市  
同じ富山の中心市街地の屋根付き広場です。ここでは色々なイベントが開催されています。まちなかお絵かきプロジェクトは、「交通まちづくり」で未来のまちを書いたのですが、ベースはプロが書いて、子どもたちがそこに描いていきます。これもまちづくりに参加の一つです。ボクシングやスケートリンクなども行われています。

★ まちに関与する  
「小布施オープンガーデン」 長野県小布施町  
小布施町は修景事業というのをずっとしていて、建物建てるときは昔からあった建物の外観や外構を意識して作られています。「外はみんなのもの、内は自分たちのもの」という考え方で外観に統一性を持たせています。  
まちの回遊性を持たせるために小さな歩行者道のネットワークというのを作って、オープンガーデンはもとより人も家の庭も通り抜けていくのですがこれが面白いのです。

「パイオニアコートハウススクエア」 ポートランド  
ポートランドのリビングルームと言われている中心の広場です。この広場は煉瓦敷きの広場ですが、広場の整備費を捻出するために 1 つ 1 つの煉瓦を市民に買ってもらい、そこに名前を入れています。公共空間は本来「みんなの場所」ですが、みんなのといった時点で自分のものでなくなってしまうです。誰かがなんかしてくれるのではないかと思ってしまうのですが、この広場は自分の場所であり続けているのです、名前が入っていますから。

「ハウスハルテン」 ライプツィヒ（ドイツ）  
一時は空き家率 70 % を超え、空地もごみ溜め化していましたが、住民たちが自分たちで庭として整備していきました。そうするとだんだん住環境が良くなり、賃料も安いので子育て中の若い世代が移り住んできます。  
ドイツの人たちは、とても手が動きます。自分たちで廃屋があればどんどん整備していきました。今では空き

金山地区のまちづくりを語る会 が、金山のまちづくりに関わる皆さんにとっての「交流や情報の結節点」でありたい。次々と新たな活動が生まれるような、「創造力の結節点」といえる場でありたい。そんな願いを込めて、本誌の名前を『NODE 【結節】』としました。



伊藤 香織氏

さらに、都市がたくさん生まれると都市間の競争が激しくなり、その中で都市アイデンティティーが強まってきました。それもシビックプライドの醸成を後押ししたと見られます。

「シビックプライド」という概念は、近年の地方分権化と都市再生の流れの中で再び注目されており、1997 年から英国首相を務めたトニー・ブレア氏は、『より良い公共建築』という冊子の序文で、19 世紀の都市で整備された公共建築や公共空間を市民が誇りを持っていたことに触れ、「私たちが公共建築を建てるときにはそうしたシビックプライドの感覚に立ち戻りたい」と述べています。

◆ まちと私の関係を築く  
私は仲間と『シビックプライド ―都市のコミュニケーションをデザインする』（2008 年）と『シビックプライド 2【国内編】 ―都市と市民のかかわりをデザインする』（2015 年）という本を出しました。

本の中で事例をあげて何を書いているかという、シビックプライド自体をデザインして市民に与えることはできません。気持ちの問題なので強制はできませんから。デザインするのはシビックプライド自体ではなく、シビックプライドを醸成するためのコミュニケーションです。本ではまちの良さの伝え方を調べて書いているのです。しかし、いきなり「プライド」と言われてもハードルが高いので、今日は「まちと私の関係を築いていく」とい

2

家率が 0% 近くになってきました。なんでも住民たちで行っていくのですが、役所も何もしないわけでは無く、貸す時の手続き等をバックアップしています。

★ まちで自己表現する  
「上古町商店街」（カミフル） 新潟県新潟市上古町  
シャッター商店街になっていた上古町の商店街に迫一成氏などの若いデザイナーが移り住んできて、「日常を楽しもう」をテーマに創作活動を始めました。『新潟お散歩マップ』には一番にこの商店街が出てきます。新潟一のおしゃれな商店街ということでしょうか。地域商品を開発、ロゴ制作など発信しています。様々なイベントから地域商品開発に至るまでデザイン、企画・運営に関わり地域振興に一役買っています。  
自分たちがやりたいことが実現できるまちだったこと、そして、「まち」や「まちの人たち」もそれを認めてくれたことが大きかったでしょう。

★ まちを妄想する  
「仏生山温泉」 香川県高松市  
岡昇平さん（仏生山出身の建築家）は、お父さんが温泉を掘り当てました。岡さんはそれをきっかけに「仏生山温泉」という日帰り温泉を設計し、営業し始めました。そして「仏生山まちぐるみ旅館」ということを言い出しました。「まちぐるみ温泉旅館」というのは、まち全体を旅館に見立てるというものです。飲食店や客室、物販、浴場などがまちに点在していて、それらを巡るのです。「まちぐるみ旅館」はある意味岡さんの妄想です。ずーと（10 年くらい）言い続けていますとだんだんお店が増え実現していつています。

自分が住むんだったら、「にやにやして」暮らせるまちがいい、自分が心地よく安心して暮らせるまちは、きっと同じように思う人がいるはずだというのが、妄想を実現させていく基なでしょう。「50m 書店」や「仏生山まち市」など色々な取り組みをしながら「まちぐるみ旅館」を目指しています。

「まちと私の関係を築く」ためにキーワードに沿っていくつかの事例を見てきました。

まちと私の関係を築くには、まちと私の関係をみんなで共有することが重要です。共有するということは、一緒に見たり、聞いたり、食べたり、経験したりすることです。特にまち中に現われてきて感じられること、目に見えてくるのが大切なのだと思います。これがまちの空気を変えていくことになるのです。

3